

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

老鶯やこの山麓に父母眠る

刈谷 志津

〔評〕老鶯は春が過ぎて鳴き方が慣れて巧みになった鶯である、この鶯の声に作者は大きく、ひろやかな呼吸をしているのである。さらりと云って至極平凡な句のようにみえるが、内容には多くの思いを秘めている。作者の佇っている位置から聞く鶯の声のひびき。山麓にある父母の墓は、そんなに遠い昔のものではあるまい、父母が先に死すことは自然のなりゆきであるから単なる郷愁で終わるが、それがもし、わが娘であったり、夫だったら、また違った受けとめ方で思いも深刻であろう。この句には選者自身同じ体験もあり、身に詰まる思いがする。

退職も別れの一つ春の雨

友草 水月

〔評〕「春の雨」という言葉の中には、艶やかさ、情のこまやかさ、などの感じがあり、草木の芽を育て、花の蕾をほころばせるという現実がある。句の作者は長年に亘って小・中学校の教鞭をとり、土佐郡の某中学校長を最後に退職している。

この句はその自分の履歴書であるのかどうかは分からないが、作者の退職という厳肅な人生の区切りの中に、教え子、同僚、先輩、知己等に対する、自己評価と考えるのだが……。

歩く人見かけぬこの頃花うつぎ 片岡 包女
 茶摘みして新茶の香りまといけり 中野 好子
 夕虹やみんな渡って逝きしまま 間 浩太
 気兼ねなく語れる仲間昼蛙 川村千凵子
 遺骨なき父靖国の春祭 大川 節弥
 初燕無事を囃して厨窓 川村 博子
 遠蛙わけなく母の恋しかり 渡辺万利子
 燭の灯の僧衣に映えて仏生会 松岡きよ子
 押し据えの灸跡太し山笑う 井上 郁子

花うつぎこの先一軒行き止り 竹崎 光子

山巒をなぞる如くや椎の花 岡本とも子

鉄線花夜の草木に巻きつきし 楠目 哲郎

そよ風にほのかな香りさくらんぼ 森岡 照月

新緑や四方の山々匂ひたつ 久田 久美

残雪の霊峰の襷渡りけり 川上こよね

わつと来てさつと帰るぬ春休み 森元二美子

畦むしり 八十余年振りむきつ 筒井 眉躬

遠耳のたしかに 聞きし春の蟬 弘瀬うき子

親牛も仔牛もないて立夏かな 中屋 桜子

板の間の黒光りして夏は来ぬ 伊藤 たみ

新茶の香庭一ぱいに漂いて 藤田 里野

わらびとり近くて遠き物語り 小島 良

柿若葉子に囲まれて米寿かな 川村 愛

老鶯の声のととのう日暮かな 筒井 文

娘待つ春日は長しやときた 大平 種香

卒業や見果てぬ夢を見ていたり 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句
 締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のことも川柳

じめじめとゆかがすべるよつゆどきは

下八川小4年 田中 二稀

がんばろうかんじをせんぶおぼえたい

神谷小5年 細木 直輝

雨がふり七色がさがくるくると

伊野小5年 山村 麻友

がんばればどんなゆめでもかなうから

伊野小5年 田島 匠

うるさいな電車の中のわらいごえ

枝川小5年 石原 華倫

温暖化 夏でもないのに半そでさ

伊野小6年 高野 眸

春になり花粉がおそろ ぼくの目を

神谷小6年 岡村啓二郎